

362) 君がいちばん素敵だった

ことば少ない君だったけど 星のごとくに輝いていた
心の奥に女の哀しみ たたえるような眼差まなざしだった
同じ季節をともに過ごして 君の瞳あこがに憧れている
君の宇宙の惑星になり 君の引力ちからに吸い込まれたい

小柄な君はどんな時でも かかと踵の低い靴を履いてた
背伸びをせずに素直に生きて 自分の道をまっすぐ歩いた
地上に降りた天使みたいに 人の心に光を与え
渚に寄せる波のごとくに 僕の心をさらっていった

君への愛を伝えたくって 僕の気持ちを手紙に書いた
春の陽射しが微笑むような 君の便りを期待したけど
僕に届いた手紙の中は さよならとだけ記されていた
愛はいつでも壊こわれやすくて 結んでないと遠ざかるもの

愛は哀しく愛は苦しく 愛はいつしか壊れゆくもの
君への おもい思い心に満ちて 涙あふれて季節は移る
ほんのわずかな日々だったけど 君に出逢えて倖せだった
今まで僕が出逢った人で 君がいちばん素敵だったよ